

# 「パネルシアター発表」における学生の学びについて：事後アンケートから考える

著者	関根 久美
雑誌名	川口短大紀要
巻	33
ページ	93-100
発行年	2019-12-25
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1354/00001276/">http://id.nii.ac.jp/1354/00001276/</a>



# 「パネルシアター発表」における 学生の学びについて — 事後アンケートから考える —

関 根 久 美

## I. はじめに

幼稚園，保育所，認定こども園などの保育の現場において，絵本，紙芝居，ペープサートなどを中心とする「児童文化財」を楽しむ活動は，様々な場面で保育者によって実践されている。保育者養成において，この実践を学生が経験し研鑽を積んで実習に臨んでいくことは，実習前教育・保育者の専門技術の演習として必須事項であり，本学でも「児童文化」「保育内容」その他の各授業において学生自らが前に立ち，保育現場さながらの実践を繰り返している。

また，幼稚園実習や保育園実習においても現場の先生方から「学校で作成したものを披露して」という指導を受ける場合も多々あり，「児童文化財」は「学生自身のため」だけでなく「子どもに楽しい時間を提供する」ものとして実践されなければならない。

筆者の担当する「乳児保育」においては，「乳児の保育内容」「指導計画の作成」の学習の一環として学生が「自作のパネルシアターを発表する」ことを授業内で行っている。この授業においての学生の演習内容を具現化し，また，その後のアンケートから「パネルシアター発表」から学生が学んだことについて明らかにしていくこととする。

## II. パネルシアターとは

パネルシアターは，1973年に児童文化研究家・古宇田亮順によって創案された比較的新しい児童文化財で，布地のパネル板【図1】に「Pペーパー」という不織布で作成された人形などのパーツ【図2】を貼ったり外したりして，お話や歌，クイズなどを展開して行う表現方法である。保育の現場では，殆どの園に「パネル台」があり，クラス担任が「朝の会」「帰りの会」などで見せたり，誕生会の「先生のだしもの」としてホールで演じられることも多い。また，子どもがPペーパーに絵を描き，それを劇遊びなどとして展開するなど，様々な活動の重要なツールとし

て使用されている。また、カラーのPペーパーや、完成された作品、多種にわたるテキストも販売されており、手軽にパネルシアターを楽しむ物的環境も整いつつある。

#### ・作成方法

- ① 登場人物などの必要パーツの外郭の黒枠をしっかりと描き切り取る。
- ② アクリル絵の具などで色付けする。
- ③ 重ね貼り、糸止め、窓開きなどの「しかけ」を施す。

#### ・演じ方

演じ手と見る側が一体となって楽しむ。演じ手はパネルの前に立つので、子どもの様子を見ながら、登場人物になったり、ナレーターになったり、歌い手になったり、保育者として話したりとその作品その場面によって対応していく。

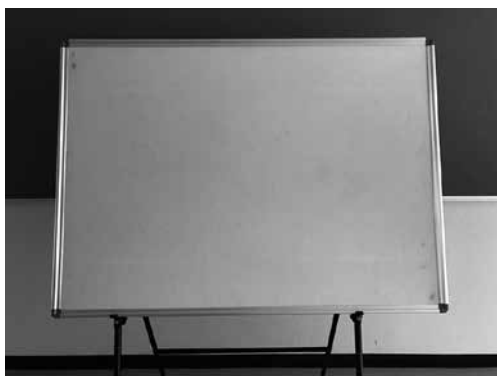


図1

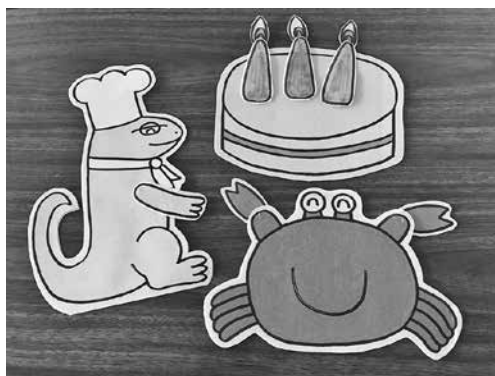


図2

### Ⅲ. 科目「乳児保育」における「パネルシアター」発表の流れ

#### (1) パネルシアター作成

教員が提示した30点ほどの作品から「自分が作成し演じてみたい」ものを選択し、テキストの型紙を写し、前述の「作成方法」で作成する。初めてのパネルシアター作成であるため、テキストを利用する。学生のオリジナル作成は次回以降とする。作成にあてた授業回数は1回で完成は「宿題」となる学生が多かった。

(2) 指導案（活動案）作成

発表までに作成したパネルシアターを子どもが見る活動の指導案を書く。作品に合った対象年齢を考え、「ねらい」を設定し、そのねらいを達成するために学生がどの様に演じていくか、詳細に記述するよう事前指導をする。また、導入・展開・まとめの流れに基づいた指導案の記述を指示した。

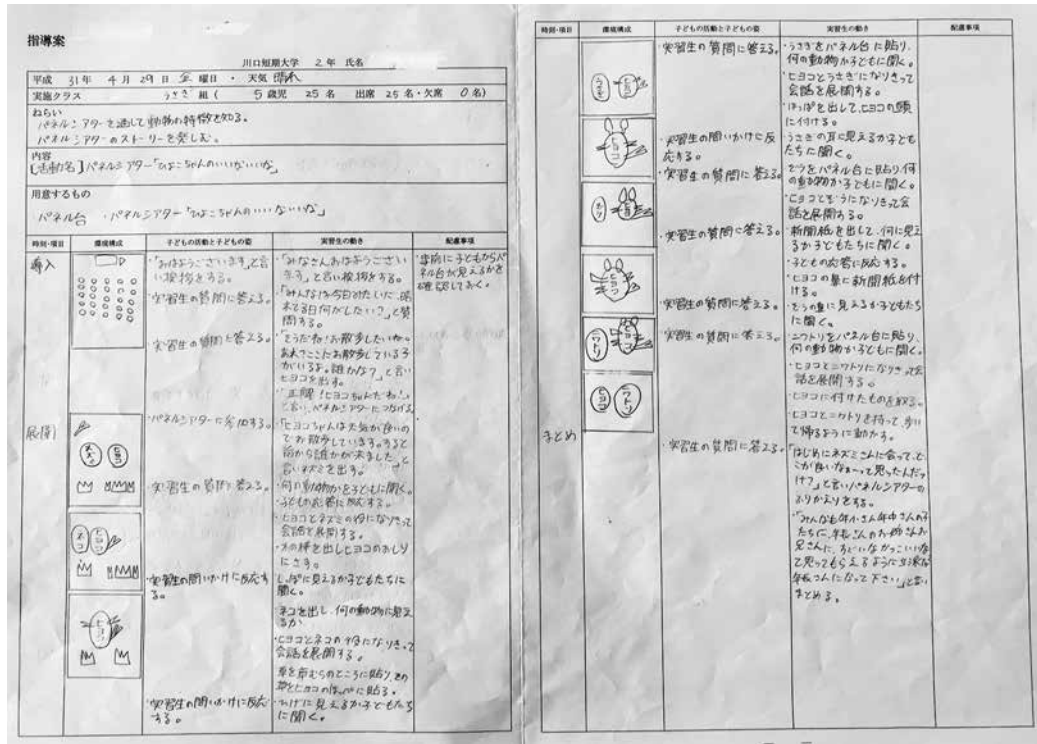


図 3

(3) パネルシアター発表

発表にあてた授業回数は6回である。発表順は「くじびき」で決定する。指導案を教員に提出し、他の学生を「子ども」に見立てパネル板の前に立ち発表を行う。導入・展開・まとめの流れで発表する。初回の学生は「指導案を見ても可」とし、2回目以降発表の学生は「指導案を見ない」で行う。

発表者以外の学生は活動中には「その年齢の子ども」になって発表者と一体となってパネルシアターを楽しむ。活動終了後に発表者の「良かったところ」「課題点」を記述する。その用紙は

カーボン紙を敷いて書き、1部は自分自身の記録に、1部は発表者に直接手渡しされるシステムとした。

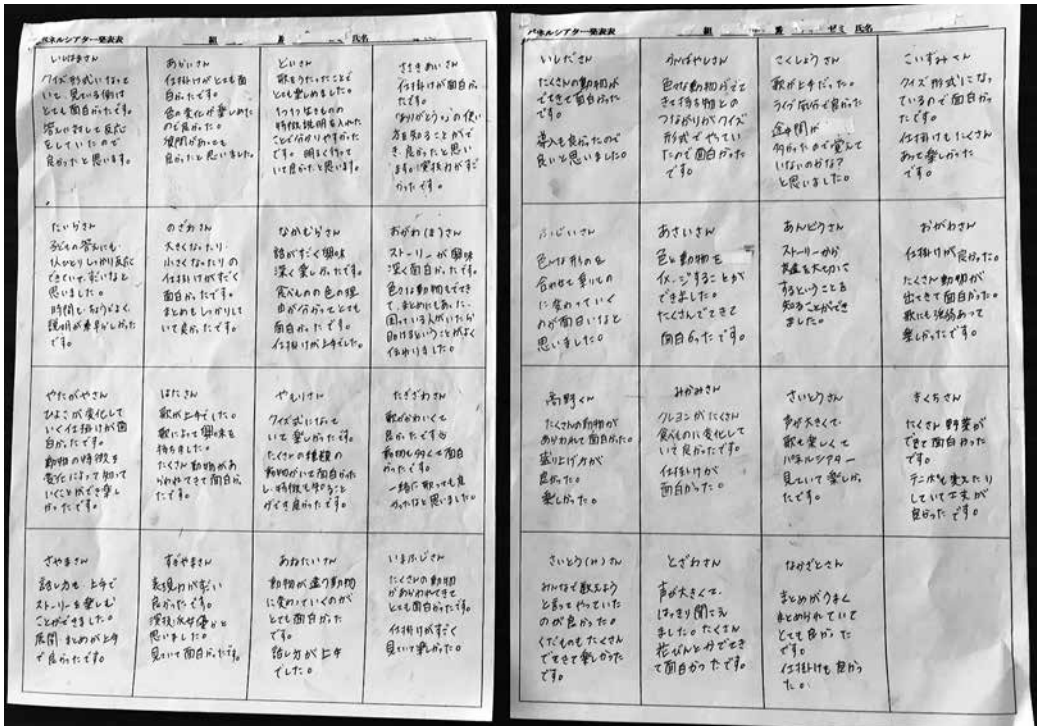


図4 学生の発表の評価、感想表

表1 学生が作成・発表した作品一覧

お話 (歌なし)	ありがとういえるかな	子ども参加型 (歌あり)	ころころまで
	ひよこちゃんのこんなになっちゃった		カレーライス
	だいごんにんじんごぼう		おっとっとこのくらい
	ぼんたの自動販売機		だれのせんたくもの
	ひよこちゃんのいいないいな		ドアが開きます
	3匹のくま		起こしましょう
	いたずらおぼけ		やおやのおみせ
子ども参加型 (歌なし)	おねぼうさんだあれ	歌	大きくなったら
	はなびらちようちよ		がんばれ忍者マン
	あわてんぼうの運転手		とんでったバナナ
	アイZOOクリーム		てのひらを太陽に
	どっちどっち		おはようクレヨン
	ごんちゃんのおみやげなにあ		ぞうさんのぼうし



図5 学生の発表の様子

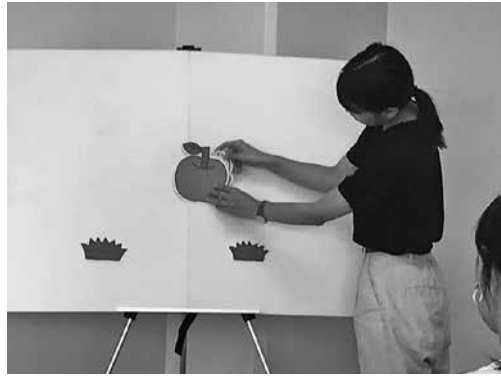


図6 学生の発表の様子

(上記の写真掲載においては、本人の承諾を得ている)

#### Ⅳ. 事後アンケートの分析

・対象学生 本学2年生

「乳児保育Ⅱ」履修生 103名

・アンケート方法…自由記述

「パネルシアターの発表全体を通して、あなたが学んだこと、理解したこと、感じたことは何ですか」

##### ○研究方法

自由記述の中で多く使われていた言葉を抽出し、そのキーワードそれぞれについて考察する。

キーワード

- ① 声, 言葉かけ
- ② ねらい
- ③ 発表者が楽しむ
- ④ 練習
- ⑤ 立ち位置 (貼り位置)
- ⑥ しかけ

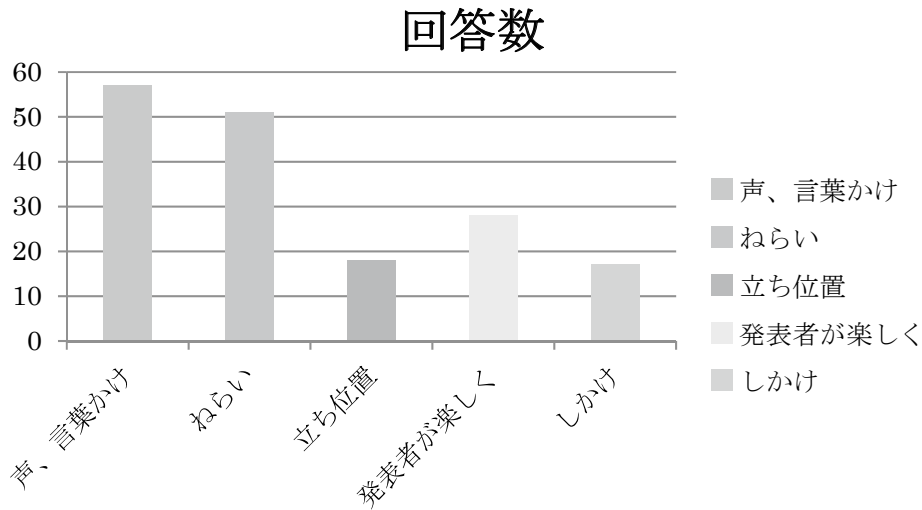


表2 キーワードの総回答数

#### ○分析結果

##### ① 声、言葉かけ

半数以上の学生が「発表する声のトーンが大切」「登場人物になりきった声」「声に抑揚をつける」「後方の子どもにも聞こえる声」「子どもがわかり易い言葉かけ」「指導案にない臨機応変な言葉かけ」「子どもに反応に応じた言葉かけ」と、声・言葉かけについて記述している。パネルシアターは視覚を重視した「児童文化財」であるにもかかわらず、声や言葉かけといった子どもの聴覚に訴えることを挙げており、話しかけること、語りかけること、子どもの反応に応じること、「視覚と聴覚合わせての作品」となることが大切と理解したと考えられる。

##### ② ねらい

今回の発表において「指導案の作成」が学びとなったことが伺える結果である。また、発表後の教員のコメントも「演技方が上手い下手ということではなく、ねらいが達成された発表であったか」について重きをおいたための結果とも考えられる。記述の中に「ねらいは指導にとって重要であることがわかった」「この作品で何を楽しむのかのねらいをたてることで、言葉かけが浮かんだ」「年齢によって楽しみ方が違うことがわかった」「どうしたらねらいが伝わるか考えた」と『指導案を書いたことで見えてきた学び』が大きかったようである。

##### ③ 発表者が楽しむ

「演じている人が楽しんでいると見ている側もニコニコする」「明るく楽しく演じると子どもも

興味をもつ」「自分が楽しんでできたので良かった」という肯定的内容の数値であるが、「緊張して笑顔がなかった」「下を向いてしまった」という反省を記述している学生もおり、「保育者は笑顔で楽しく」することが、子どもの笑顔も引出し、内容の理解や興味関心にも繋がっていくことを感覚的に察知した学生が多かったと考えられる。

#### ④ 練習

「練習する中で〇〇が大切と気が付いた」「パーツの何を外すかなどの練習が必要」「セリフが出てこなかったので練習が必要だった」「事前練習をしたからスムーズにできた」など「練習」の大切さに気付いた学生も多かった。しかしながら、ぶっつけ本番でも臨機応変にやってしまう学生の存在も否定することもできず、「学生の特性」がこの「練習」というキーワードには関連していると感じる。筆者の予想にはこのワードがなく、学生がこの発表に対して思ったよりも真剣に取り組んでいることが分かった。

#### ⑤ 立ち位置（貼り位置）

「パネルシアターに被らない立ち位置はどこなのか考えた」「貼る場所、立ち位置が大事な環境設定とわかった」「子どもが見やすい立ち位置が大切」「見えなかったら意味がない」といったパネルシアターは視覚、まずは「見ること」が大切であると考えた学生も多くいた。発表のはじめに「みんな、見えますか？」と聞いている学生もいた。作品によっては、「見るだけで楽しい」ものもあるので、この立ち位置が重要と理解したと考えられる。

#### ⑥ しかけ

「しかけを楽しんでもらうための工夫をした」「しかけのある作品が楽しかった」「次はしかけのあるものにチャレンジしたい」「しかけが子どもに見えないようにする」パネルシアターの醍醐味は「しかけ」にあるといっても過言ではないほど、「しかけ」のあるなしで「おもしろさ」が左右する。そのことに気付いた学生の数は以外と少なかった。

#### ⑦ その他

その他のキーワードでの注目は「子どもが主体の指導案の書き方」「歌では音程が大事」「導入が大切」「パネルシアターの黒枠の太さ」などがあつた。アンケートに上記①～⑥のキーワードが複数含まれている学生が多く、共通した「学び」を得たと考えられる。



## V. まとめ

今回のアンケートの特質として、まず第一に挙げたいことは「学生の記述量の多さ」である。普段のノートや試験回答、実習の反省には見ることのない「枠が埋まるほどたくさん書いている」アンケート用紙が回収された。これにより、学生ひとり一人が「パネルシアター発表」に前向きに取り組み、その結果、「学んだこと」「理解したこと」「感じたこと」が多岐にわたりあったことがわかった。そして、自分の発表に対しても、友達の発表に対しても「何かを習得しよう」とする意欲がうかがわれた。

アンケート結果から

1. パネルシアターは「視覚」「聴覚」どちらも大切。「見て、聞いて、先生とコミュニケーションをとって楽しむ」児童文化財であること。
2. 指導案を書き、それによって実践することの重要性和難しさ。
3. パネルシアターの特性の理解。
4. 学生がどの様に「発表」にむけて努力したのか。
5. 自分の発表を振り返り反省点を見つけ、新たな課題を見出す。

以上のことを理解したり、気付いたりしたりしたことがわかった。

保育の現場ではこの発表からは予想もつかない「子どもの反応」がある。パネルシアターはそれを引き出すことのできる実に楽しい児童文化財である。今回の発表での学びを活かし、学生が現場で子どもとパネルシアターの楽しさを共有する場面、時間をもってもらいたいものである。

### 参考文献

- 松本峰雄編著「保育における子ども文化」わかば社、2014年  
阿部恵著「みんなのパネルシアター」株式会社メイト、2007年  
浦中こういち・小沢かづと著「わくわく・楽しいパネルシアター」ナツメ社、2013年  
阿部恵編著「パネルシアターどうぞのいす」チャイルド本社、2006年  
古宇田亮順監修「0～5歳児うたってかんたんパネルシアター」ひかりのくに、2016年

(提出日 2019年9月25日)